なかった人でも恐らく引き入れられていくだろうと思える内容の濃い本である。

（望月　洋子）

〔株式会社智書房、文京区白山二―五―二、電話〇三―五六八九―六七一三、A五判、三二八頁、一八九〇円〕

川村　純一　著

『千葉県伝染病史』

著者は一九九九年に『病いの克服　日本痘瘡史』（思文閣出版）――これについては学会誌四六巻一号に、蔵方宏昌会員によって新刊紹介欄にとりあげられている――を上梓して、わが国における痘瘡の歴史を俯瞰することに成功した。それから五年後の今年、千葉県という一地方に限られてはいるが、そこで流行したいくつかの伝染病をとりあげて、克明に事実をおって完成したのが本書である。

著者は一九二六年生まれの眼科医である。早くから医史学に関心をいだいて、本会会員として地道な活躍をつづけている篤学の士であり、房総石造文化財研究会に所属して地域の歴史にも造詣が深い。そのような背景にささえられながら三〇数年にわたる「郷土医学史」、とくに「治療信仰」の研究で、一九九五年に日本医師会最高有功賞受賞の栄誉に輝いている。

本書は「序章」からはじまり、五部に分かれている。I部の「伝染病の流行」は痘瘡、コレラ、ペスト、発疹チフスの流行史である。確実にたどれる文献にもとづく歴史なので、これらの諸病はすべて明治以降の時期にかぎっているのは、事実を追い求めようとする著者の意欲の表れであろう。

II部の「種痘の普及」は、これらの伝染病の中で予防しうる唯一の疾病である痘瘡の予防、すなわち種痘の歴史である。江戸時代の県域各藩――佐倉藩、佐貫藩、勝山藩、柴山藩の四藩――における種痘の実施状況にふれたあと、明治以降の接種状況にふれている。接種料金についても言及して、とかく忘れがちな予防接種の経済面におよんでいるのは、正しい見方であるといえよう。現在では各地方自治体とも予防接種料金は無料であることがおおいが、そのころの物価にくらべてけっして安価ではない接種料金は、接種を希望する民衆にとっては相当な負担であったと想像される。これが障碍となって種痘の普及をはばんでいたとする著者の論証は、おおいにうなづけるところである。

これにつづいて「種痘事故」にふれている。一九七〇年のいわゆる種痘禍を経験したわたくしにとっては見逃せない言及であり、とくに昭和九年（一九三四）の種痘禍をとりあげているのは注目に値するが、資料の不足によって十分な解明にいたらなかったのはいささか残念といわざるをえない。むしろこのような論考は一地方の出来事としてとりあげるよりも、全国規模において論議すべき問題点であろうとおもう。

著者はさきの『病いの克服』においてこの点を深く追求しているので、そちらの著書を参照していただきたい。これによって眼科専門医でありながらも、種痘問題にたいしては確かな見識を有していることをうかがうことができる。

Ⅲ部の「防疫の功績者」――中扉には「防疫の功労者」とある――では防疫のために尽力した人びとや、防疫活動中に殉職した人びとに言及している。疫病の原因が判明していない時代にあっても、そのとき、そのときの学術的事実を基礎にした対策がねられてきたが、それがかならずしも完璧に効を奏したとはいえない。そのために防疫の第一線で寝食をわすれて挺身しながら、不幸その病におかされて殉職した警察官や治療に献身的な活躍をしながら、無知と誤解にもとづく人びとの凶刃にたおれた沼野玄昌などが紹介されている。

このような痛ましい犠牲者がでたのは、民衆の知識の不足にもとづくものと解釈できないこともないが、そうとばかりはいえないことは、現代のように学問が進歩して、その知識が民衆に浸透しているはずだと思われる時代になっても、近頃の巷をさわがしている鳥インフルエンザ騒動にみると、はたして人間の知恵が進歩したといいうるだろうかとの疑問をいだかざるをえない。

「防疫のために尽力した人々」としては井上宗端、佐藤泰然、浜口梧陵、関寛斎をはじめ十四名の人物があげられている。その地方に建立されている墓碑や顕彰碑の碑文が引用されているので、その資料的価値はおおきいものがある。

Ⅳ部の「疫病除けの風習」では「治療信仰」に造詣の深い著者ならではの論考であるが、期待に反して『千葉県本埜村誌』ただ一冊を引用しているにすぎず、あまりにも惜しい叙述である。詳細は他書にゆずるといわんばかりの表現によって書物全体を圧縮しようとする意図がみえるが、そのような制約に煩わされることなく、この部分の記述を著者に期待したかったと思うのはわたくしばかりでないであろう。

Ⅴ部は本書の三分の一をしめる「疫病・伝染病関連年表」と「統計表」である。和銅二年からはじまるこの年表は、平成十五年までの千葉県域における伝染病の流行を詳細におっている。しかし出来うれば出典をあげておいてほしかった、と欲張った願いが頭をよぎる。

その地方独特の史料をひろく収集して、その土地の歴史や風土に通じた学者によってまとめられた報告は、われわれにとって得難い、ありがたい文献である。各地方単位でこのような業績が積重ねられると、それらを集大成することによって日本全国の業績を浮彫りにすることができるので、各地の篤学の士によってこのような企てを完成していただけないだろうかとの望みをいだいいている。

著者は千葉県医師会公報委員長をつとめていたおりに、本書の執筆をうながされるヒントがあったという。『千葉県医師会雑誌』に連載された「千葉県医療史」の著者である杉山大幹氏から従容されながらも、その続編を執筆することを躊躇していたところ、やはりやむにやまれぬ責任感から本書の上

梓を決心したにちがいない。なお本書の基本となった諸論文によって、著者は昨年一一月に千葉県医師会医学会学術奨励賞を受賞している。さきの日医の最高有功賞といい、今回の県医学術奨励賞といい、至極当然の受賞というべきであろう。古希をすぎてもなお、このような内容の重い著書を矢継ぎ早に刊行された著者のエネルギーには、あらためて心からの敬意を表するものである。

なお蛇足ながら、まだ『病いの克服』をよんでおられない向きには、本書とともに、この書を併読されることをあらためてお願いしたい。

（深瀬　泰旦）

〔審書房出版、千葉県流山市流山二―二九六―五、電話〇四七―五八―〇〇三五、二〇〇四年二月一〇日、A五判、二七六頁、本体二五〇〇円〕

編集後記

五〇巻二号をお届けする。当号には原著三報・研究ノート一報のほか、資料・記事・書籍紹介を掲載することができた。本誌は以前より日本学術振興会の刊行補助金を受けてきたが、一昨年度に打ち切られ、昨年度に補助が再開されたが、今年度は再び打ち切られてしまった▼補助期間中は年間総ページ数が規定され、審査を経た論文を次年度送りとするしかなかった時もあった。補助がないことはページ数制限がなくなり、審査済み論文を迅速に掲載できる利点もある。一方、発行費を押し上げ、補助のない学会台所を苦しめてしまう。悩ましい問題だが、次年度から再び補助が得られるよう、編集委員会も一層尽力したい▼ところで会員諸氏におかれては、横浜・鶴見での総会を終えたばかりで、まだ印象鮮やかと拝察する。私も神奈川地方会の会員としてお手伝いさせていただいた。今回は演題数の多さから二会場となり、パソコンソフトによる発表も二〇題を越えた。これらにより些かの混乱が生じ、演者・座長の双方にご迷惑をおかけしたこと、この場を借りて会員諸氏に陳謝申し上げる▼他方、演題数の増加は本会の発展の象徴であり、まことに喜ばしい。これは新入会員の発表が増えたためであり、それゆえパソコンソフトによる発表も増加したと思われる。総会は学会の一大行事であり、今後はこうした新潮流への十分な対応の必要性を痛感した▼ちなみに先号は総会抄録号だったが、執筆者の多さと締切から発行までの時間等の問題で、編集委員が全ゲラ校正を例年分担している。それゆえ今年も多くの演者が不本意な誤植を指摘されていたが、当事情を拝察いただき、なにとぞご容赦願いたい▼さて本誌編集委員会の重責を長年努められた深瀬委員長、および小曽戸・新村の各委員が前号で退任され、替って蔵方・坂井・西巻の各委員が新任された。中西・瀧澤・町・真柳の各委員は留任となったが、本誌の向上と発展に編集委員会一同尽力する所存なので、会員諸氏のご鞭撻と一層の投稿をお願い申し上げる。

（真柳　誠）